

時事新報定  
時事新報へ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價  
報料廣告料へ左ノ如シ

圖〇一箇年前金六圓  
〇時事新報社ヨリ直報ニ郵便ニテ送致スルモノニ限り右定額ノ外ニ  
爾月十五錠ノ過送料ニ由來フ  
時事新報廣告料前金

月曜日并に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り 時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月 前金八錢にして地方に郵送する分は此外に貼用する郵 便印紙の代價を申受く可し
一 行 五 銀 活 字 廿 四 古 詞
一 日 限
六 日 在
七 日 以 上
十二 銭
十一 銭
十 銭 五 雪

一行五號活字廿四字筋	一日限	二日以上
一 行 二 付	十二錢	六日迄
	十一錢	七日以上

田中 晴平 桂平

條例第八條を表面  
てちに照し稍や過嚴の  
くわせん

少黨自ら其小あるを輕んじ黨議の責任を忘れて或は彼に從ひ又此に就き離合去就殆んど常あくして政治社會に波瀾を多くし其極卑劣濫行となりて時としては大弊害を生ずるみどあきを保せず歴史に實例乏しからざる所あれは我輩は夙に之れが改正を希望したりしに今度新に發布せられたる集會及政社法に於ても依然これを存置せしは世人の定めて共に失望せし所ならん邪推をあすもの或は說をなして是れは政府が自衛の必要上に出でざるものにして民間に大政黨の組織あるときは其勢力は以て責任内閣の實行を速くに足るべきが故に豫しめ之が遙かとなすものなれば申せども是れは眞實の邪推にして今之政府に實力ありながら斯る姑息の策を執る可き理由あし又或人の說に日本の人民は元來政治に慣れず、政治に慣れる者が俄に國會の開設に逢ふて奔走する其折柄みれに許すに政社の連結通信を以てするときは甲乙の差別もなく唯勢力ある黨派に附和雷同し其主義が果して國家に如何ある利害を及ぼすべきやを講究せざるの有様なるが故に一縷の破綻如何なく其目的を達す可き否や一考を要する所あり法律を存して時運の到来を待の意に出でたるなりと此說或は然らん稍や條理あるが如くなれども事の實際に於て能く以て政社間の連結通信を禁ずるは單に表面の觀察にして裏面より窺ふときは自から連通の路あきにあらず社と社と公けの通信は許されざるもの又通は禁ずるに由なし、社の委員としては往來す可らざるも一個人にては往くも來るも自在なる可し詰り其人の私信往來を遮断するに非ざる限りは實効を見るほど難かる可し蓋し法の不完全なるにあらず人事の本來に於て遂に防ぐこと能はざる所のものなればあり當に實効を見ざるのみか特に法律を設けて其法網を遁れしむるが如きは誠に遺憾なる次第にして其手段のます／＼陰險と爲りて却て吉凶の間に苦々しさ感情を生ずるに至りては將來政治社會の安寧進歩の爲不利の大なるものあり畢竟其入の如は世の政論者の附和雷同を危険なりとして之左の事態す可きものなきが如し、裏面に恐るゝに足

らされば之を表面にするも亦恐るゝに足らず、法出で  
し奸生じ、令下りて詐起る、寧ろ禁令を粗にして民心の  
流るゝに任せ青天白日公明正大ならんとふを願はしけ  
れ或は獨逸、攘太利の如き政體の國にては何れも政社法  
間の連結を許さず杯と申せども我輩は各國の事例を聞  
はず唯我國今日の事情にては此種の禁制の存外に無効  
ならんふとを掛念する者なり

右の外新定集會及政社法に付々逐條吟味すれば尙ほ遺  
憾の處もあきに非ざれども細論は擱き大體より之を從  
前に比較するときは頗る寛裕に移りたるものにして専  
も角も政治上の改良進歩として我輩の満足する所あり

○市村座劇評　　晚涼生

し再び明日より開場する由なるが、畫の義は右俄かの休業にて、寫し取る暇あきゆゑ、今回は容赦を乞ふて、此次の芝居に譲り暮り得たる佳評は即ち左に掲げ、續き讀者の清覽に供す。

一番日鳴鶴月白浪は去る明治十四年に今の河竹彌が書かれて新作したる狂言なり白浪作者なにぞトおおいでこし行ふよしと云ひ度りこし

名を受けし思ひ出に此所は一概盜賊づくめにて仕て退き、なんど工みしか篇中の男女多くは盜賊であるの趣向。奇抜なれども常情に遠かるの嫌わりと難を云へば云はるものゝ其工みの形跡少もし見物の目に立たぬは流石新報が評を慕られし程の買目は充分に見えたり。榮之助(鶴藏妹お濱)は思ひの外よく出来たり此お濱は娘形にて世話をする夫れば／＼六ヶしい役十四年の芝居に秀調の體を見て作者が筆を執りしものゆゑ其頃至て上評なりしが榮之助のふ濱は愁ひのふなし充分利口す秀調を見た眼に物足らぬ思ひありとは至極無理な評判、その代り折り／＼飛びつきたき程愛嬌あるは秀調なんどの及ぶ所で御座らぬ是は又可愛いお濱なり○源之助(辨天お照)は打て付けの役此様な事させては現るに非ず容貌みそ筋れ概して此前の半四郎より好き出来なり○馬十(講釋師辨山)は勵どもすれば懷中より鉛筆を見せてもらひたい所あれど夫れは強ち源之助の各に非ず容貌みそ筋れ概して此前の半四郎より好き出来なり○馬十(講釋師辨山)は勵どもすれば懷中より鉛筆でも出しそうに見え數醫辨庵らしいと洒落れたる千太と知りてのユシリ／＼上手なれども此坊の本尊たる千右衛門を助けず自分で芝居をする氣味あるは老練と稱し難し其後明石屋に奉公して實貞を裝ふ所申分なし○荒次郎(漁師鶴藏)デツアリと肥えて角所やら可愛き沖藏なり最少し瘦せたらば骨體にて妙あらんとは無理ある文二役(口入婆かよく)扮し得て妙あり○幸藏(下総松)は好れど是も自分で芝居すると云ふ評を免れずからう筈あし殊に新作の當時より十年計り經て腕に鍛冶がある○菊五郎(明石鶴藏)凄味の蟲に掛けて天下に比類なき菊五郎、作者が筑めたる明石の鶴藏を演す畢竟の所に左脚次の松崎千太と相會して餘るに理を説く

昨日は三日だら  
十一年五月三日 終日暴風波  
り當日正午ま  
堂にて乗客の  
募りてリヴァ  
なりと云ふ  
と記し丁りて  
るものはあるま  
だらう太平洋で  
三百二三十しか  
しい者だ」と獨  
ど云ふテッぶり  
ヨ々として歩  
のと見え右手の  
日本の郵便印紙  
の発行が御座り  
子の如く首を伸  
三四度撫で廻は  
なさるに相違あ  
申す事は出来ま  
からへ、ゝゝ、  
はすに予居士は  
はニユーヨルク  
ので此印紙は十  
座いません」と  
是れはくと喜  
に歐洲大陸諸國  
樂しむもの多く  
世界と云へる思  
を興ふる等競に  
は結局之を金に  
自から之を樂し  
しても中々買わ  
せ今少し口數を  
集の多きを誇り  
すして之を買買  
て三四十銅若く  
小兒の戯の如く  
嘆し居たり扱て  
見ず特に航海も  
思ふ處にて早く  
を入れると一  
前の責任先生も  
朋友手に手を組  
を立て之れに輪  
多くの乗客次第  
て雲耶山耶と地  
見ゆる等競に  
ス タウチ  
ンス タウチ  
あり思ひくの  
律の行はるし處  
來りたる婦人客  
見廻はしてキヨ  
子を以て渡られ  
くするを見れ  
く見るが常なり